

## あとがき

植木さん（敢えてこう書かせていただきます）の退休記念論集の掉尾を飾る文章を私ごと書いている。だが、後輩の中で、面倒をかけた点では人後に落ちぬとの自覚があるので、これまでの言わば罪滅ぼしの萬分の一にでもなればと思いついて、この文章を書かせていただく。植木さん、何卒ご海容のほどを。

さて、本書の自撰著作目録を見ても明らかなく、植木さんは、三十代前半に弘前大學に着任する以前、既に複数の著書と数多くの論文を世に問うておられた。「資料の絨毯爆撃」と稱される、読む者に有無を言わさぬ迫力ある論者は、不斷の調査と研鑽とによって築き上げられたものであることを、四歳年下の私は間近に目睹する機会を数多く持った。これほど植木さんに親炙する機会が多かったにもかかわらず、こと學問のこととなると、不肖の後輩たる私は逃げ回ってばかりいた。だが、こんな私に對しても、植木さんは根氣強く指導して下さった。

『校注唐詩解釋辭典』に始まり、その前後に書いた論文の原稿の殆どに對し、細かなチェックを入れるだけでなく、何時も大量の資料を添えて送り返して下さったのである。毎回訂正の赤字で一杯になった原稿を送り返されてばかりいた當初は、不遜にも、「植木さんは叱咤はあるが激勵がない。」とぼやいていたのだが、周囲から野球の千本ノックのようだと言われたほど厳しい指導に何とかこたえられ

るようになった頃、ある原稿に對して植木さんから、「良い出来だと（松浦）先生が褒めていたよ。」と、ぼつりと一言伝えられた時、涙が出るほど嬉しかったことを今でもはっきり覚えている。先生からの激勵が嬉しかったのは勿論だが、もし、植木さんが先生の考えに反對であったなら、この言葉を伝えてくれることは決してなかったかと思っただけである。

山口縣にある女子大に就職が決まった年、大學教員として今一つ自信が持てなかった私の申し出を快諾した植木さんは、弘前大學の研究室に私を迎え入れ、様々な助言と共に、膨大な資料をコピーして持たせて下さった。今私が何とか研究者の仲間入りをしていられるのも、今は亡き松浦先生の指導と共に、植木さんの厳しくも暖かな指導があったればこそと衷心より感謝している。

植木さんが身を以て示された學問への姿勢は、創刊以來、本誌に折に触れて寄せられる重厚な論考によっても、十分後輩たちに傳わっていることと思う。更に、近日上梓される『中國詩跡事典』に關わった諸氏も、私と同じように鍛えられたと聞き及んでいる。齡六十半ばにして、このパワー。本當に頼もしい限りである。

ここで定年という一區切りを迎えられる植木さんではあるが、これからも、高く聳える燈臺として、私たち後輩たちを導き續けて頂きたいと強く願う次第である。